

「有る程の菊抛げ入れよ」小考

高 田 瑞 穂

大塚楠緒夫人の逝つたのは、明治四十三年十一月九日である。明治八年生れの楠緒夫人は数えて三十六歳で死んでしまつた。

十一月十三日（日）晴。

新聞で楠緒さんの死を知る。九日大磯で死んで、十九日に東京で葬式の由。驚く。

大塚から楠緒さんの死んだ報知と広告に友人総代として余の名を用ひて可いかといふ照会が電話でくる。

ちようど、修善寺の大患の予後を、内幸町の胃腸病院で静養中の漱石は、日記にこう記した。一日おいて十五日、さらに十九日の日記にも、それぞれ楠緒夫人のことが記されている。

十一月十五日（火）晴。

床の中で楠緒さんの為に手向の句を作る。

棺には菊抛げ入れよ有らん程

有る程の菊抛げ入れよ棺の中

十一月十九日（土）晴。

今日は楠緒さんの葬式である。好き天氣で幸である。

妻が昨日電話で風邪の由を言ひ越す。（略）

今日大塚の葬式には行かれぬらし。

床中の漱石の心に、楠緒夫人の死が、ある持続した感慨として在つたことはここに推察に難くない。楠緒夫人の夫文学博士大塚保治は年齢において二つ若く、東京帝大卒業年次において二年古い、漱石の旧友である。保治博士に寄せた漱石の信頼は、同人あての書簡を通じても明らかである。朝日新

聞に初めて文芸欄を設けたことを報告し、あわせてその「スベシアル・コントリビューター」となることを頼んだ四十二年十一月二十四日付の手紙などは、その好例である。学問的にも人格的にも信を寄せた友人の妻楠緒は、衆知の通り、竹柏園門の歌人であり、「お百度詣で」の詩人であり、作品集「晴小袖」の作家である。しかし私がここで記しておきたいことは、闊秀作家としての楠緒女史ではない。旧友大塚博士夫人楠緒が、漱石に好ましい女性として在ったということである。そしてそのことは漱石自身がわれわれに物語るところである。「硝子戸の中」の第二十五の章がそれである。

「私がまだ千駄木にゐた頃の話だから、年数にすると、もう大分古い事になる。」

この書き出しの書かれたのは、大正四年の一月から二月にかけてであり、漱石の千駄木時代は、明治三十六年三月から二十九年の暮までである。およそ十年の歳月がその間に流れている。

「或日私は切通しの方へ散歩した帰りに、本郷四丁目の角へ出る代りに、もう一つ手前の細い通りを北へ曲つた。其曲り角には其頃あつた牛屋の傍に、寄席の看板が何時でも懸つてゐた。」

新書版漱石全集の注解によれば、この寄席は「岩本亭」という講釈席であらうということである。「夏目漱石先生著 吾輩ハ猫デアル 松林伯知述 八月五日夜」という看板を見て、「本郷日蔭町ヲ通ツタラコンナ看板ガアツテ面食ツタ。

全体ドンナ事ヲ述ベル了簡カシラ。」と小宮豊隆氏に書き送っているのは四十年八月五日である。このことも注解に附記されている。たまたま、伯知出演の当日にこの看板を見、本当に面食つて、即日、葉書に筆を走らせたと思われる。

「雨の降る日だつたので、私は無論傘をさしてゐた。それが鉄御納戸の八間の深張で、上から洩つてくる雫が、自然木の柄を伝はつて、私の手を濡らし始めた。……人通りの少い此小路は……上を見れば暗く、下を見れば佗びしかった。……さうして私の心は能く此の天気と此の周囲に似てゐた。私には私の心を腐蝕するやうな不愉快な塊が常にあつた。私は陰鬱な顔をしながら、ぼんやり雨の降る中を歩いてゐた。」

「雨の降る日」というと、すぐ「彼岸過迄」の暗い一章を思い出す。そして、右の文章はもちろん「彼岸過迄」の後に書かれた。しかし、書かれた事実が、「彼岸過迄」の明治四十五年より何年か前のある日の出来事であることも自明である。こういう場合の作家の心とはどういうものであるうか。回想の中に、その後の他の回想が混じり、あるいは、時の流れが回想された事実自体をもゆがめるといふことも、けつしてないわけではないであらう。しかし、今はただ、漱石のことばのままに、千駄木時代のある雨の日、漱石が「陰鬱な顔」をして歩いてゐただけを思い浮べよう。その頃漱石の内心には「心を腐蝕するやうな不愉快な塊が常にあつた。」という記述に目を止めよう。ここで私は、この「或日」の上にやゝくわしい年月を推定して加えたい欲求を感じずけれど、

未だ確言する勇氣がない。千駄木時代は、おしなべて、漱石の神経衰弱時代である。

「日蔭町の寄席の前まで来た私は、突然一台の幌俵に出合つた。私と俵の間には何の隔りもなかつたので、私は遠くから其中に乗つてゐる人の女だといふ事に気がついた。……車上の人は遠くから其白い顔を私に見せてゐたのである。私の眼には其白い顔が大変美しく映つた。私は雨の中を歩きながら凝と其人の姿に見惚れてゐた。同時に是は芸者だらうといふ推察が、殆んど事実のやうに、私の心に働らきかけた。すると俵が私の一間ばかり前へ来た時、突然私の見てゐた美しい人が、鄭寧な会釈を私にして通り過ぎた。私は微笑に伴なう其挨拶とともに、相手が、大塚楠緒さんであつた事に、始めて気が付いた。」

森田草平の「夏目漱石」によれば、明治二十七・八年の頃漱石は新橋の名妓おえんのブロマイドを一枚買つてきて、机の前に飾つておいたことがあるそうである。当時ばん太とやらんで嬌名をうたわれたおえんは、ばん太の丸顔に対して「瓜実顔の、何処かに理智の影の見えるやうな、きりつとした面差し」であつたという。漱石はそんな顔立ちを好んだと草平はかなりはつきり断定している。私は楠緒夫人がどんな顔立ちの人か知らないけれど、漱石が「大変美しい」と見て「凝と其人の姿に見惚れてゐた」雨の日の情景を思い、ある感興を禁ずることができない。しかもその「美しい人」は、突然、微笑をたたえて「鄭寧な会釈」を漱石に与えたではな

いか。

「次に会つたのは夫から幾日目だつたらうか、楠緒さんが私に、『此間は失礼しました』と云つたので、私は私の有の儘を話す氣になつた。『実に何処の美くしい方かと思つて見てゐました。芸者ぢやないかしらとも考へたのです。』其時楠緒さんが何と答へたか、私はたしかに覚えてゐないけれども、楠緒さんは些とも顔を赧らめなかつた。それから不愉快な表情も見せなかつた。私の言葉をたゞ其儘に受け取つたらしく思はれた。」

この場合、「楠緒さんが何と答へたか、私はたしかに覚えてゐないけれど」というのは本当であろうか。自分が話したことばを覚えており、話された相手がどういふ顔色をし、どういふ表情をしたかをはつきり記憶しているものが、その返事だけを忘れてしまふということがあり得るであらうか。

「此間は失礼しました」というが如き挨拶は覚えていて、この時の楠緒夫人の返事の方は忘れるということは、どうも私の臍に落ちない。しかも、その時の楠緒夫人が「不愉快な表情を見せなかつた」と記されている以上、漱石は、あるいは自分のことばが、ことに「芸者ぢやないかしらとも考へたのです」といふ言い方が、楠緒夫人にあるいは不快にしはしないかと氣づかつていたことを自ら告白している。それでいて当の返事だけを忘れる——どうもそういうことはなさそうである。さらに言えば、そういう氣づかいを冒してあえて楠緒夫人に、その美しさに見惚れたという事実を物語つたのは、ど

ういう気持からであつたらうか。それが單なる社交上の、したがつて本質的に無責任な言い方で言われたものでないことは、「私は私の有の儘を話す氣になつた。」という表現がたしかにわれわれに示してくれている。それは、人が決意して告白する場合にふさわしい語調である。

「それからずつと経つて、ある日楠緒さんがわざ／＼早稻田へ訪ねて来て呉れた事がある。然るに生憎私は妻と喧嘩をしてゐた。私は厭な顔をした儘、書齋に凝と坐つてゐた。楠緒さんは妻と十分ばかり話をして帰つて行つた。其日は夫で済んだが、程なく私は西片町へ詫まりに出掛けた。『実は喧嘩をしてゐたのです。妻も定めて無愛想でしたらう。私は又苦々しい顔を見せるのも失礼だと思つて、わざと引込んでゐたのです。』是に對する楠緒さんの挨拶も、今では遠い過去になつて、もう呼び出す事の出来ない程、記憶の底に沈んでしまつた。」

漱石の早稻田転居は四十年九月のことで、既に朝日新聞社に入り、「虞美人草」執筆の最中に當る。だから、早稻田移転以後の漱石は、文名世に鳴り、遠路をものともせずに参加する人々にとりかこまれていたはずである。それにしては、ひとり楠緒夫人の訪問を「わざ／＼」と言い、「程なく西片町へ詫まりに出掛けた」というのは、いささか丁寧に過ぎたことと見られないでもない。たとえそれが畏敬する友の妻君であるとしてもそうである。しかも、ここでもまた漱石は楠緒夫人のことを記憶の底に封じ込めてしまつてゐる。この

後に、先に引いた日記の十三日の分と十九日の分を一にしたらうな記述が来て、この章は終つてゐる。右の引用を通じて私の言いたいことは、漱石に楠緒夫人が「美しい人」と映つてゐたこと、漱石は楠緒夫人と会い、楠緒夫人と話すことを喜んでゐたこと、さらに漱石は楠緒夫人とのことを十年前後にわたつて胸奥に止めてゐたということである。

楠緒夫人の名はもう一所、「思ひ出す事など」の第七章に見える。胃腸病院の床の中でウォードの「力学的社会学」上下二巻を読破した漱石は、その中の「宇宙創造論」の部分に関連して、太陽系の歴史や生物全体の進化から見ると、一人間の生死の如きは殆んど無意味であるという考えに導かれ切角九死に一生を得た喜びが薄れ去るのを感じた。

「斯う考へた時、余は甚だ心細くなつた。又甚だ詰らなくなつた。そこで殊更に氣分を易へて、此間大磯で亡くなつた大塚夫人の事を思ひ出しながら、夫人のために手向の句を作つた。

有の程の菊抛げ入れよ棺の中」

「硝子戸の中」で俚中の楠緒夫人に會つた時も、漱石の心は暗く淋しかった。それだけに、楠緒夫人を見た瞬間の、一種亡我に近い氣分は、漱石にとつて有難いものであつたにちがいない。その楠緒夫人は死んでしまつた。死んだ楠緒夫人を思い出すこともまた、「心細く」「詰らなくなつた」漱石の心にとつて一つの救いであつた事実がここに告げられてゐる。一般に、人の心が淋しく沈む時、そこからぬけ出そうと

して、人は親しき人の死を思うであらうか。そうではない。生そのものとも言えるような、たとえば子供や草花や小鳥やが、暗中の光として映るのはそういう時である。漱石は死んでしまった楠緒夫人を思つて、手向の句を作つて自らを慰さめることに成功したという。漱石が楠緒夫人を好ましい人と思つていたと断じて、もうさしつかへはなさそうである。

四十一年四月から東京朝日に連載された楠緒夫人の小説「そらだき」は、もちろん漱石の推挙によるものであつた。

連載中に楠緒夫人は肺炎を病んで、執筆に支障を生じた。その時漱石はかなり長文の見舞状を送っているが、その中にこういうことばがある。

「新聞の方御心配に及ばず小生どうせ一兩日中に渋谷川氏へ参る積につき面会の上万事同氏へ相談可致置候につき御介意なく御療養可然と存候もし御転地先にて御徒然の余り御執筆の運にも至り候へば好都合と存じ夫のみ祈り居候」

事は筆者の病氣に由るとは言え、ここに見られるものは破格と言つていい好意であると思う。連載作品の中絶を苦もなく認め、しかも、連載を中止することは考えていない。行きどき過ぎた配慮である。さらに末尾に次のように附記して病床の人に声援を惜しまない。

「一週間に一返手紙をよこせとか毎日よこせとか云つて無花果を半分づゝ食ふ所がありましたね。あすこが面白い。今迄ノウチデ一番ヨカッタ。」

これは五月十一日付の手紙であるが、重ねて十六日にもほ

ぼ同趣の手紙を送っている。五月十八日付の小宮豊隆氏宛の手紙には次のことばがある。

「大塚さんのそらだきが好評噴々の由社より報知有之先以て安心致候。池辺主筆曰くあれは中々うまいですね。池辺主筆すらうまいと云ふ。読者の歓迎するや尤なり。」

こういう漱石の態度は、鈴木三重吉や森田草平などに対する態度とは随分ちがうものに感じられる。その漱石に対する関係において、楠緒夫人に一番近い野上豊一郎夫人八重に対する態度とも別である。

「玉稿二篇とも拝見。『紫苑』は少々触れ損ひの氣味にて出来栄えあまりよろしからず。『柿羊羹』の方面白く候。是も非難を申せば（略）」

四十年十二月九日の八重夫人宛の手紙の一節である。漱石は八重夫人を一個の作家として遇し、その作品を不遠慮に批判している。そういう点で、八重夫人は、三重吉や草平と同列に眺められていと言つていいであらう。ひとり楠緒夫人に関しては、漱石は批判を忘れ、無暗に励ましている。池辺主筆の評言をユーモラスに受け入れて、安心したり喜んだりしているのである。

私は長々と、楠緒夫人に寄せる漱石の氣持を付度してきたが、ただそういう事実の存在を云いたいためにだけにそれをしたわけではない。実は、私をしてこの稿を書かせた理由は他にあつたのである。次にかかげる小泉信三氏の一文が、私を動かす契機となつたのである。

「モラリストである漱石の小説について一つ氣着くのは、『道ならぬ恋』がそのテーマに多いことである。モラリストたるにも拘らずか、或はモラリスト故にか(略)」

そして小泉氏は、明治二十四年八月三日、二十五歳の漱石が正岡子規に嫂の死を報じた書簡を引いて、次のように推論される。

「後二十余年を経て『行人』の筆を進めるとき、漱石はこの自分と同一年の嫂を追想することはなかつたか。實在の嫂を以て作中の嫂に擬し、嫂に対する我感情を以て二郎の直子に対する夫れを量ることはなかつたか。」(夏目漱石)

小泉氏の指摘通り、漱石の手紙はまことに真情あふるものである。非常な長文で、その中に十三の悼句を含んでいる。その一部を引いてみよう。

「わが一族を賞揚するは何となく大人気なき儀には候得共彼程の人物は男にも中々得易からず況んや婦人中には恐らく有之間じくと存居候(略)先づ節操の毅然たるは申すに不及性情の公平正直なる胸懷の洒々落々として細事に頓着せざる杯生れながらにして悟道の老僧の如き見識を有したるかを怪しまれ候位(略)一片の精魂もし宇宙に存するものならば二世と契りし夫の傍か平生親しみ暮せし義弟の影に髣髴たらんかと夢中に幻影を描きここかしこかと浮世の羈絆につながるゝ死靈を憐れみうたゝ不憫の涙にむせび候(略)」

次に十三句中から幾つかを書きぬいてみる。句の下に注解を加えてあるものもあつて、そこにも漱石の真情が見られる。

朝貌や咲いた許りの命哉

君逝きて浮世に花はなかりけり(容姿秀麗)

鏡台の主の行衛や塵埃(初七日)

小泉氏は推論の後に、「今それを何人にも尋ねることは出来ぬ。それは漱石自身と嫂とに於ても答へることは出来ないのかも知れぬ。」と記した。その通りである。しかし、この大胆な臆説は、けつして漱石を傷つけるものではないであろう。それのみか、ともかくも、漱石内奥の暗部に一筋の光線を当てたという点で、漱石理解のために何物かを寄与し得ているとも言えると思う。漱石研究の異常な活況にもかかわらず、漱石の人にも作品にも、依然として謎は残されていないわけではないのである。荒正人氏が名づけていう漱石の「暗い部分」は、未だ暗いままなのである。ことに「三四郎」から「心」にいたる系列において、漱石は何故いわゆる三角關係を追尋し続けねばならなかつたかという謎は、まさしく漱石の「暗い部分」の中心に位置する。そこで私も、小泉氏のひそみにならつて、こう言つてみたかったのである。漱石のこの謎に、大塚楠緒という「美しい人」の存在が、何等かのかかわりがなかつたかと。もう少し具体的に言いたい氣持もないわけではないが、今はこの程度に止めたい。

野田宇太郎氏は「文学散步」の開祖である。氏の足跡は今や南海の果に及んで余すところがない。これは、書齋の中に坐つてする無精極まる私の文学散歩なのである。消閑の一助とならば幸である。「漱石ところどころ」その二(本学教授)